

## 資料2

書評：鈴木広編『災害都市の研究 島原市と普賢岳』九州大学出版会 1998年2月  
早稲田大学 浦野正樹

「貧しい生活は団結を強め、豊かな生活は団結を弱める。…純情はむしろ貧しい生活の中に成長する。而して富める生活によって人々は互いに冷淡となる。…ただ此一般原理を島原半島の生活にあてはめてみよう。半島に住みついてゐる人々は生活の程度が高くない。…彼らは自然の圧迫の下に苦しみぬいてゐる。互いに相手の苦しい気持ちを知ってゐる。相寄り相助けなければ生きられぬことを知ってゐる。心と心は自ら直接に結びつく。別して、度重なる地震、海嘯に対する心配、過去に於けるその共通なる経験の記憶、これらは彼等の心をきつしりと緊密に結びつけたであろう。」(高田保馬『貧者必勝』)

阪神・淡路大震災を契機に、都市コミュニティのあり方や都市的生活様式をめぐる議論が展開したが、この本の著者らは、高田保馬のこの文章を引用することにより、今まで近代市民社会論の文脈に依拠し「自立した個人が集まってつくるコミュニティ」として理念化されてきたものとは異なる都市コミュニティのあり方を提示しようとしている。いわば、環境条件の変化に適応して自己組織的に再編しようとするコミュニティの有機体的特質を浮き彫りにすることで、近代個人主義のもつ虚妄性と限界を描き出そうとした著作である。

この著作は、雲仙普賢岳噴火という環境変化に直面し適応しようとする「島原コミュニティ」の姿を描いたもので、編著者によって環境研究の一環として位置づけられている。著者の言葉を借りれば、「比喩的に一種の『社会有機体』のごとくに仮定されうる島原コミュニティが、突発的に直面した噴火災害が長期化・広域化していく過程で、それにどのように反応しようとしたのか、について幾らか『法則』的な形で総括しようとし、試み」たものである。

ここで設定した論述の焦点との関係で、研究のスタンスについていくつかの特徴と論述範囲の限定がみられる。まず、一つはこの研究が影響を受けた個々の被災者の被災体験や災害対応の研究ではなく、「災害都市」の研究であることである。第二は、市民社会論の文脈で都市コミュニティの有様を論じるのではなく、「ばらばらな地域

が合併してできた単なる『行政都市』がいかにして島原コミュニティになりえたか」を読み解く、災害都市のコミュニティ変動を主題として扱っていることである。そして第三は、そのため、直接的な研究の焦点を島原市にあて（隣接した被災地である深江町については言及せず）限定していることである。

そのなかで、島原コミュニティを論述するにあたって、島原において展開したさまざまな活動を、集落、旧町村を中心とする生活共同体としてのコミュニティ、行政都市としての島原市、島原半島文化圏、を活動基盤にもつ3つの活動・対応に理念的に分けて、それぞれの典型例を分析している。

本書は、大きく三部構成になっており、第一部は、雲仙普賢岳噴火災害に見舞われた島原コミュニティがその災害の進行過程に沿ってどのように対応しようとしたのかを明かにしようと試みた部分である。第1章で島原市の概要（社会経済的、歴史文化、地域住民組織の構造まで）を概観したうえで、第2章以降、上記三つのカテゴリーに沿って災害発生以降の地域社会の動きを描き出している。第2章では、先述したにあたる行政の対応を、第3章と第4章では、島原半島文化圏を背景にして展開されたとする2つの典型的な住民運動（に該当する）  
- 国への陳情を目的に結成された住民運動団体の活動と地域おこしグループを母体にしたボランティア団体の活動 - を、第5章では、にあたる町内会の対応を描き出している。そのうえで、第6章において中間総括を行ない長期災害下のコミュニティ変動のあり方を考察し普遍的な傾向を抽出しようと試みている。

第二部は、長期災害に直面して起きた島原の「コミュニティ変動の内実をより深く探る」ために、噴火災害以前と以後の2回にわたって実施した島原市民アンケート結果に依りながら、コミュニティ意識の状態変化をコミュニティ・モラルとコミュニティ・ノルムの概念（鈴木広編『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』1978）を用いながら描写していく第7章、阪神・淡路大震災に伴う被災地救援活動の組織化を通して、日常化し

つつあった復興段階での島原コミュニティの姿を描き出そうとした第8章からなる。

第 部は、全体の総括（第9章）を行なったうえで、編者がこの雲仙の災害研究や水俣市等を対象にした公害研究を進めるなかで構想するに至った環境社会学の観点から都市社会学の現代的課題を摘出しようとした「展望」（第10章）を提起している。いわば、現代社会と社会学の現在の動向に関して、編者が読者に伝えるメッセージの部分である。

この著作では、全体を通じていくつか重要な論点・主張が提示されているが、ここではその一端を紹介しておこう。

ひとつは、災害に直面したコミュニティの反応は、平時から非常時への移行におけるコミュニティの適応的自己組織過程であり、『loosely structured community』から『tightly structured community』への変容として把握できるとした点である。著者らはこれを、島原半島全域に普及している地域ボランティアの組織化、町内＝校区＝全市にわたる町内会・自治会活動の活性化、活動機能別の諸団体すべてに共通する共同目標（島原の生き残り！）への結集と組織的な団体的行動の展開、といった三つの主要局面で確認したとしている。

コミュニティにとっては、災害との遭遇、その危機への対応がコミュニティへ結束させる一種の原体験として働き、集合沸騰によりルースな構造はタイトな構造に変化し、コミュニティのシンボリックな特徴が形成される。それにより、再び弛緩して日常に戻っても、記憶装置として非日常的な祭りを演出しながらコミュニティは維持されていく。こうした一定のリズムで、コミュニティというひとつの社会が成り立っていくのだというデュルケミアンの発想が、上記のような把握の背後にはある。当該コミュニティが一定の環境のなかで生き残ろうとする限り、「必ずコミュニティ構造の鞏固緊縛パターンの形成」が不可欠だという主張は、その意味で非常に説得的である。

ふたつめは、それゆえに、（流動型社会と結びつきやすい）普遍主義的価値観や近代個人主義によるのではなく、土着社会からみた住民活動評価がすなわち、コスモポリタニズムとは異なる地域的特殊主義に基づくコ

ミュニティ形成が ありうるという主張である。本来は、この地域的特殊主義をつきつめていくことで、はじめて普遍に近づける地平が開けるのであって、逆ではない…。ここに、近代個人主義の虚妄性の指摘や共同体主義、集合態主義評価の議論が提出される。

この議論は、住民運動論や第三世界を扱う研究者たちによって云われ続けてきた「居住点の思想」や「現場の思想」と確かに共鳴する部分がある。その＜現場＞で形成されてくる思考や認識の構造から離れるのではなく、その構造を見据えそこから抽出していくことではじめて他の社会と通底する認識を獲得できるのではないか？あるいは、＜現場＞の思想と＜現場＞の思想が拮抗しばかり合い相克し（調整し）あうなかから、普遍に通じる位相が顔をみせてくるのではないか？という思考方法とつながっているように思う。

第三は、個と個がどのように向き合い、生き残るための共同の実践に入っていくか、に関して、ミードのリフレクション概念を用いながら共同性の創出＝確認過程として説明しようとした点である。共同性をいかに創出し確認し、それを説得力のある実践的なものにしていくかは、災害復興や生活再建の諸要求の実現にとって（また住民運動や社会運動全般にとっても）常に最も重要なポイントであった。著者は、それをG.H.ミードの「リフレクション（反省作用：reflection）」、共同体の認識における「全」の意識、創発特性、理想と現実との相互作用などの概念装置を用いて描き出そうとする。これは、いわば、事態を見つめ直し、そしてその中に現われた自分の姿を極限まで見つめ直していくことで、共通・共同性を紡ぎ出せる（社会的文化的パターン等にシンボライズされた）伝統的なストックを再確認し、それを最大限生かす形で「観念的な」共同性を説得力のある実践的なものに仕立て上げていく過程である。

地域の伝統・個性を生かしその生き残りをかけた実践を通じて、はじめてコミュニティは強くなる。人々は、コミュニティを通じて自分達の生き残る道を開拓し伝統的なストックを活かすべを創造していくという見方は、この意味において共感しうるものであり、この範囲でブルデューのハビトゥス・実践概念と通底するものを読み取ることも出来よう。

第四は、島原を総ボランティア社会と位置づけ、このボランティアを支える精神として相互扶助的な意識が中心にあるとした点である。神戸の事例でも、市民社会の成熟といった文脈でのボランティア賛美論とはかなりズレル形でのボランティア活動の実態があり、災害救援という点で考えても、島原でみられたような互酬性の原理をもとに、それを広く結集し生かすチャンネルやネットワークの拡大・整備（コミュニティ等により媒介する方法もその一つ）という観点から、災害時の民間レベルでの広域応援のあり方や災害救援文化を構想し、救援体制を充実させていくための見直しが必要になっているという指摘である。

第五は、編者らが構想する環境社会学の意図と現代の社会学のあり方に関する課題提起についてである。

編者は、「環境の劣化が内在化して身体の劣化を不可避のものとし、この傾向律に照応して精神の劣化たるイデオロギーが優勢となる。このように総括できるのが、21世紀へ踏み出そうとする先進諸社会の生活様式を尖端的に集約しているアーバニズムの具体的内容である」として、そのなかでいかに sustainable life（生存、生き残りを賭けた生き方）を模索するかこそが問われていると論じ、あらためて全体知の重要性を強調している。そのうえで、「総環境の規定性を捨象して主意主義に傾斜する思考」を選択するか、「19世紀以来の古典的社会理論の共通特徴である全体知をつねに志向して認識を自閉から解放」するかの選択が、社会学に問われていると、社会学の現状に対して鋭い警鐘を発している。

以上あげただけでも、ここで提起されている論点は明確で示唆的であり、かつ論争的である。

ところで私のみるところ、現代社会は、生活圏の広がりやグローバル化等の取り巻く外部環境の変化（少なくとも認識の変化）に伴い、地域的な広がりやを基礎に置いた「コミュニティ」の意味と位置づけが希薄化し、準拠されるべき＜共同＞認識の枠組み自体がゆるぎ変化していく状況にある。その中で、共同性の創造と確認自体が人々にとって大きな争点になり、共同幻想を紡ぎ出したそれを戦略的に仕組むことで自分達の認識を確認し全体社会へ働きかけようとする人々の行為が、分析の焦点に据えられつつある。認識の基盤の侵食と希薄化が進行

するなかで、われわれのリアリティを構成する＜現場＞とは何なのか、またどこでどのように構成されるのか、自体が、論争の主題になる。

島原の事例でも、コミュニティ構造の鞏固緊縛パターンの形成は、異なる現状認識の間の激しいぶつかり合いとその中での共生感覚の再発見・創出の結果でもあった。そこに至るまで、さまざまな試行錯誤と一定の年月の経過があり、徹底した個別の利害集団単位や状況認識を共有する少数者のグループ単位での問題点の抽出を踏まえて、それを相互に批判しながらも、最終的には尊重し取り込むことでしか先に進まなかった過程でもあった。その過程では、島原再生のための、アイデンティティの創出が常に問われたように思う。そうした観点からみたばあい、結果としての一丸的な対応を強調しすぎているのではないかという印象を受けた。

最後に、この著作は災害の実態と対応を知るための災害過程検討の資料としても、随所に必要な整理が施されており参照する価値が高いことを付け加えておきたい。とくに、災害発生以降の地域社会の動きを、行政、被災者団体と住民運動、ボランティア協議会、災害と町内会のそれぞれの側面から立体的に描き出そうとしており、災害の全体像を知る上で貴重な資料を提供しているといえよう。とくに、災害以前と以後において同一の枠組みによってアンケートを実施することにより、災害によるコミュニティ意識の変化を探ることができた点は、貴重な収穫であったと思う。